



新製
古々抄

新製
東花式
呈
之
九

能諧古と抄君之下

再校東大式序



むーりるの建さうふと仰祈のせし余等
^ニ虚^ニ立^ニくとも志^ニありあ^ニる初^ニ善^ニと^ニ橋^ニ陳^ニ如^ニの
^ニ実^ニ一^ニは^ニより^ニ儒^ニ書^ニの^ニ四^ニ百^ニ余^ニ章^ニも^ニ実^ニ子^ニく
^ニと^ニと^ニ一^ニへ^ニあ^ニる^ニ懲^ニ惡^ニと^ニ縶^ニ悲^ニ子^ニの^ニ屈^ニと^ニ
^ニ初^ニ懲^ニと^ニ一^ニも^ニ時^ニの^ニ要^ニと^ニせ^ニる^ニ一^ニ屈^ニと^ニ屈^ニ
^ニハ^ニ実^ニも^ニ実^ニあ^ニる^ニと^ニせ^ニる^ニと^ニ変^ニ通^ニや^ニる^ニ子^ニ
^ニある^ニ一^ニは^ニ能^ニ諧^ニの^ニる^ニや^ニ和^ニ号^ニ連^ニ号^ニの^ニ序



と汲あうも法をおもてて式とてあまはし
罪とてはをやうとて代て其の様様と
もいいて二種の増とてあつたと儒師のる
いざんといひ連能の家といふ近とては
虚実と自在なれいせれと二種の説とて
いぬと今世二冊とていま式の附録とて
つと前とあつたつる五つとてその説と
いふと下通の例とてあつたつる二つ
とて一とてそのつとあつたつる二つ
の要とていひておひくと月々の説と

あるとて多とて同録とて古に祖の遺訓
あるとて○いひ白^{マヒ}とてその式とて
の新製あるとて△いひ白角とてその
二様とて取捨とていひつる二つとて
の説とていひつる二つとて人の罪向と
舞とて不道の罪とていひつる二つと
いひては、^{マヒ}とていひつる二つとて
とていひつる二つとていひつる二つ
西成敗とて刑罰の法とていひつる二つ
とていひつる二つとていひつる二つ

の理と云くつてあつても云くつて禪家の同答は
殺父殺母成佛否やと同すは自己返照シテモ看と
成佛不成佛と云つて答ふも父母と云つては
あつても心は同よつて云くつても佛の位は言
と云くつても儒者も実を云くつて云く
否とは云くつてもあつても佛も云くつて云く
自在ありと云くつても儒の祖と云くつても
宰予の井仁の難同しなありとも子貢が人
の釣詔と云くつてもあつても云くつても人の難はと
云くつても云くつても儒佛の要人と云くつても例の要通

自在ありと云くつても云くつても云くつても
禱と云くつても云くつても云くつても
つて視聴言動の持たれい我と云くつても用と云く
つても云くつても云くつても云くつても云くつても
の云くつても云くつても云くつても云くつても云くつても
きと云くつても云くつても云くつても云くつても云くつても
念と云くつても云くつても云くつても云くつても云くつても
て云くつても云くつても云くつても云くつても云くつても
ちんと云くつても云くつても云くつても云くつても云くつても
て云くつても云くつても云くつても云くつても云くつても

と窺ひ遠く万世の明盛にやうせよと我れ
おそれてはるまじく涙にほろろとておそれ
けんやとて一室深己商の秋八月十六日け
序文とまじりて文皇觀の塔前と歌
て萬葉調再歌とあらせしむる也

東卷式目録

大段十二箇條
小段五十五條

一花と桜也事

○辛崎のむし山桜の事 ○花と桜人の事

○新集一巻の桜の事 ○猿蓑集と系桜の事

△富士花野と桜の事 △桜とむし等の事

△岩根の花と桜の事 △二句一巻の花也事

△春秋の花と差ふの事

一月に月と桜也事

○宵闇は月と云ふ ○星名は月の

○星月おれ設の ○掌は月日星の

一 月は月也事

△前句より月といふこと

△月より前句よりいふこと

一 月は一字は限りの事

△月といふ字をかくこと

△月といふ字をあはれんこと

一 儀式の席は奉句也事

△一字のむとも名の ○面白類白の

○屏風のり草子金の

一 當季は物名也事

△玉は美言の ○桃は春の

△松虫は句法ある

一 五文字を語也事

○五文字は附合の

△此所の字をくはる

一 起向は句作也事

○幸崎の松は様

△殿入は曲節地の

一 附合七名八躰此事

有心 會款 通句 起情

○ 向附 柏子 色立

右七名八案方ニテ對附八員外ス

△ 其久 其場 時分 時節

時宜 天相 觀相 面影

右八躰附方ニテ空掬ハ員外ス

一 懷中ノ名目此事

○ 百韻 七十二候 源氏 五十韻

○ 四十四 二奇仙 首尾吟

一 束韻ノ向叔此事

○ 源氏行 ○ 二奇仙行

△ 長歌行 △ 短歌行

一 同季ハ二句玄一モヤ此事

○ 二奇仙の遺訓ニ花二月の例ある

○ 名残の裏ニ春秋二句の例ある

右と抄序同終

万法一例序

東窓坊

はらく古今の法式と云ふは御経と義通別圖の
法あれは儒書と礼と書教の式ありてかこころ
又百の戒律と云へてこころを威儀と云ふ
もゆると云ふとはあふ人の修けの時と云ふ
たまわく靈雲の功とはこころ静しと時と云ふ
時と云ふは縦横自在と云ふはこころ離れ
こころありと云ふと聖人の義通と云ふはこころ

ありてあれは老花揚と云ふはこころ連能
と云ふは人しぬか念書と云ふはあふ族しと時と
あれはこころいし時と云ふはこころ下しと云ふ
名んよりし知のははちりてこころやこころ能
いた家れりのであると云ふは齊楚のむしに
名とはこころ世に五倫の文と云ふはこころ歳
の各いふと云ふはこころ多しと云ふは言
七言の法と云ふはこころ百韻の式と云ふはこころ
りて百余年と云ふはこころ儒の法と云ふは
こころいふと云ふはこころ優格と云ふはこころ

いけ能清といふやうに我邦の和光とていふべき
まこれといふるはとらへて式とさるゝつた仙
の町と言ふ能清といふは佐の御筆といふまじ
しうこれと連寄せ家といふは底安の新式
と鑄形とをさるゝ例に當り信のちりといふ
て一歩ふつたまじりといふなりゆいて我とい
能清といふ余年の新制といふて能清の能清
といふふふといふはといふの能清といふて
指令を嫌のばといふより古式の論といふも
あつていふてこれといふの設といふていふ

能清のいふといふといふていふていふて
記向の能清といふていふていふていふて
いふていふていふていふていふていふて
え禄の中比より實永の能清といふていふて
とさるゝいふていふていふていふていふて
おし又きといふていふていふていふていふて
いふていふていふていふていふていふて
とさるゝいふていふていふていふていふて
自章式の所録といふていふていふていふて
詩系連派の中といふていふていふていふて

ことをれとてめくこを跡と原とあるのこを
 いふふと自知する者せられせけぬ一冊と
 ぬふく之を所の世向とあけ次し我堂の
 鴉鳴とあけ次し百世の説と便あるとて
 例の愛護し用捨とす一

○ 幸壽の松とむより 勝と
山と栞とあはる 幸雨

け翁句に湖南のまをとりて今をいふ句をも
詠するに及んでちるにけ服の山裾とて時の
変遷も時と松とむとつひにふと雨の裾と

了哉と橘のふ様とをわと我他い玉け様
 いむし忠孝の山様とるる下

○詠
花
山
櫻
人

けり可く檀林の能潜せあると中右此決約
 之の能抄と書は之を例の左凡の能
 あれ、今此能潜の端なるを但し様く
 僧専系の名目あり、主人を花よきとされ
 ちと様北なるもあり、て花よ様のい
 不秘の秘訣といふも也

○ ^{新句} 本のもともけも終も様うふ

^{花序} 部うむむの盡北一乃田

○ ^{新句} 志く水く葡萄の枝うに

^{花序} 新様 版一むいふ笑ふきり

いふ句となふの遺訓也ふの様と奈集れみ句
うう新折の花序ふ山花あり後の様は様
集の所ふうう新折うう山花ありて今北
多様と名残の曲節也あふ日本書ふ北四叶
ふりう系詠ふ二集の撰おとさうれふ
い例のふひくすもや我家の山花論ふ花と

様ふあふも様ふあふううもあふうう言説不到
の所様ううううとふと秘訣ふあふ二こ
子あふおふをらるやふふあふう一我家の
能活集と天和の比ふ能解うう冬ふの
ら論ふ及ふと姿情ふおふ我頼集ふうれ
て花実ふはふに様葉集ふうあふらる
け比の炭俵集と変化の中北曲節うう能活
はかくと変ふあふうあふれい様葉の大佐
ふ様の巻と一部の巻と軸とつひふ集北撰前
の句あふううううに名残の曲節とふう一部の

虚実をあらわさずんや糸梯と例の秘訣を
了さるるに又幸此優游ありと我

糸梯

ゆつた此芳名と云ふ牡丹は

牡丹

我國のそとにありて咲くもの

いふ所より牡丹のあやうう元ある岩の牡丹
と云ふ所の掛札の金賛やさうと郭公の賢
とありてそは此能清の國にありては牡丹の
花はさういふうを山梯のそとと用中を認
むとあれは和漢の花とあるといふは牡丹
のそとにありて牡丹と云ふ牡丹と云ふれ

いふ所より牡丹のあやうう元ある岩の牡丹
と云ふ所の掛札の金賛やさうと郭公の賢
とありてそは此能清の國にありては牡丹の
花はさういふうを山梯のそとと用中を認
むとあれは和漢の花とあるといふは牡丹
のそとにありて牡丹と云ふ牡丹と云ふれ

糸梯

ゆつた此芳名と云ふ牡丹は

牡丹

我國のそとにありて咲くもの

いふ所より牡丹のあやうう元ある岩の牡丹
と云ふ所の掛札の金賛やさうと郭公の賢
とありてそは此能清の國にありては牡丹の
花はさういふうを山梯のそとと用中を認
むとあれは和漢の花とあるといふは牡丹
のそとにありて牡丹と云ふ牡丹と云ふれ

又その字をいふこともなく、かゝるやあるにこそ巻の
花は、いふて例の寂誦と寂子と様と花と
論をなれと、更に事とて調をなすありて様と
いふ、あつて例の寂誦と花と、ぬくもさういふ時
と様の字をいふと、さういふやうに、その寂誦に
一味とり、但しむ、尾上の二つ、いふ所の二つのことと
摘り、これと連なり、能誦といふ。

△^{前句} 雛子鳴く、名をいふ、寂誦と寂子と、様と花と

け、寂誦と山中、寂事あり、いふと、さういふ花に、
いふて例の寂誦と寂子と、名をいふ、寂誦と寂子と、

その字、いふ、寂誦と、寂子と、例の名と、様と
なれ、いふと、様と、さういふと、寂誦と、様と、
とも、寂誦と、寂子と、様と、さういふと、寂誦と、
とも、寂誦と、寂子と、様と、さういふと、寂誦と、

△^{前句} 寂の字、いふ、寂誦と、寂子と、様と、花と

寂誦と、寂子と、様と、花と、寂誦と、寂子と、

け、附合と、寂の新誦と、寂誦と、寂子と、様と、
寂誦と、寂子と、様と、花と、寂誦と、寂子と、
とも、寂誦と、寂子と、様と、さういふと、寂誦と、
とも、寂誦と、寂子と、様と、さういふと、寂誦と、
とも、寂誦と、寂子と、様と、さういふと、寂誦と、

け設と其の井はうゝまはらうとけ集とるひ十余家
のて名とあけて一むくゝとて魂とすつれる美神
此百韻うけりされゝる句とて意とすゝはさく
秋のむとれゝ句花とるゝてゝと著此胡蝶とれて
てけ花の客とをそれゝ後の花と合くまゝと
一とれゝ花とるゝ胡蝶と二句一との格と似あ
そゝと花の洞とかりてけ花といふむるゝれゝ
胡蝶の花とて用ある客と花とるゝ用ある秋と
まゝとて差ふとるゝ一と著にゝけ式と似は
彼とて例と格とてけの指合と嫌とて

よとけの用とるゝあゝとけ設とるゝいゝ
やと方と例とるゝ通とるゝ

○月に月と月と事

むゝと連詠とて月に月と百韻とあれゝ
くゝとあゝとて不案と似はゝおぬゝと
よゝとていゝとて天象の法嫌と目と
百とてけとて月と月と詞とて作者と
とて後とてあゝとてとてとてとて
とて附の句とてとてとてとてとて

先格の句とあけて當時の設とありてむむと
多う月座よりうなふ隠見の句にあり

○ 青園とありぬる秋の文選

小より秋に 月をさるる

け青園とせはさしてぬふも名前の設あり
そとそひの七句目より例の月秋と斬れい
け雲まの秋まともき一に十六七の青園より
唯今此月の附かくれいまふ秋の風来とせ
秋と向並とのそと一と時の念ねとせ
青園の打越し月のありぬのけむいかに

けとて十句目も月とぬと一とひの秋ま
やふく花ふの月も念ありとまゝ隠見
の句にとりらひて

○ 八月と旅ありるも小幡錦

そふ句を此中秋の名よりとていふてのふ
月のまをあつてむむとやけとるふと青園
の秋と唯今の月と而れを言て月とふと
よむとをけとるもと一とひの二と二月のま
とひの近くいふ青園の妙用とて一とやとる
世等の設とぬふと例のまゝ通ありと我らの

先格の句とあけて當時の設とあるはむと
多ういふ月座よりうへなる隠見の句に
あり

○ 青園とあるはる神の交遷

小より秋に 凡そなる

け青園とせよはてして故およむ名の設あり
そとより秋の七句同より例の月秋と断れい
け遷まの秋とせよはてして十六七の青園より
唯今此月の附くはれい遷る神の威灵とせ
秋と向遷とのこととまゝて時の念転せされ
青園の打越し月のありはれはむ川か

はてして十句同より月とせよはてして秋と
や庭く花ふの月とせよ念あると置て隠見
の句にとりらひて

○ 八月と旅あり くるく幅錦

そよ句を此中秋の名よりとてはてして秋の
月の字とあつてはむとせよはてして青園
の秋と唯今の月とせよと念あると置て月と
よとせよとせよとせよとせよとせよとせよ
とつり近くはむとせよとせよとせよとせよ
世等の設とせよとせよとせよとせよとせよ

かたし我を世傳あるに二月八月と假名に
かかれし月と云ふ字を改めとおされしに其次に
音訓の議論あり今より名向のあり二月
音はひと一入のふ月と訓は唱へ語は
空天のひきあひに我を改め音訓のあ用
よすまを改めま名向の改めとて二月の
評論あり古おと二月おの名とあけしと秋
ありといふに我二月と嫌の論ふそれと
そと秋と二月とあむ名向脱牙とす
け名向ある時とて二月とあむ秋とて七月の

月と他の子とて名とと一と改め
例の時ありと我從今の議論をまゐる
ねるのま訓也

△ 母と息と尊徳子の 月日星

世傳句を賀比金珠とて母のふと一能
の名と改めて晩年よけ子と考ふるに
世傳はねあふとあの子あれかく改め
ありけり其の議論は二月と今に二月
ふけり月日星とあふのあやあれい
て二月とあひけり二月とあふ月おの例と

あつては雲の折返しよまゐるの月とや月ひ
くさじきく月のはるは秋のまじきくは
け今と但し月のまゐる——たのちけ句の浮論
をうよとそとた歌より母のまを裁入て
あしうまのあやとこれのまをうよと論
ふこれと細く論とてまをうよとく
と句この浮論あれはまのまをうよと
月日星は説といふまのまをうよと
一世の衆議ある——おし月花のうよと
一おそれたりとまをうよと

○二むれ月世事

世は傳ふ世の式と月夜と指合ありて次の句
と月とゆつと月とこまをうよと
と句と附方のまをうよと月夜と
連能の家は式あれは二句と句のまをうよと
指合の遠きまを——あらねと貴人への句
とまをうよと時直はまをうよと宗近の
移員と句と或はねるのまをうよと
まをうよと載る時と二句と句のまをうよと

かゝる時今世附はるゝ次め句は月と云ふ
まじやと云ふ今世附はるゝ二部の式目と云へ
お向ふ月と云ふは月と云ふお向ふめと云
と平亮を例の二句三と云へてお向ふ月と
月と云ふは二部の月とお向ふと云ふは
前句より月と云ふは月と云ふ

掃地はせほよりお化のうれお

△ 玉世と云ふれのは世と云ふ

あらはせせと云ふと云ふ

と云ふの月世と云ふは月と云ふ

これはお向ふよりお化のうれお
と云ふは世と云ふは月と云ふは月と云ふ
と云ふは世と云ふは月と云ふは月と云ふ
と云ふは世と云ふは月と云ふは月と云ふ
と云ふは世と云ふは月と云ふは月と云ふ
と云ふは世と云ふは月と云ふは月と云ふ

△ 踏をけてもはる世の世の世

月と云ふは世と云ふは月と云ふは月と云ふ

け月と云ふは世の世の世と云ふは世の世の世
一解やはらお向ふの全解より月と云ふは
向はるは世と云ふは世の世の世と云ふは世の世の世
と云ふは世の世の世の世の世の世の世の世の世の世

より老の短氣と取合ふる月の働を知らず
てその名の冥合を神助とす

△ 干物と云ひて煮入ぬりきり
けと登くとす 月はお

け附方と案帳の両用して干物と云ふと案
と云ふ干物と云ふ月附方といひかくは
かきおくするの備せる程あれおぬる接の
をいふやとこれと案帳は可とす
あれいふより案とすお後二案の凡削と
あつても案と削のよき変化なり

○ 月の二字と見れば事

け格とあつてと云ふれ月のおふり或はお方
の指合と或は天象の去嫌と月を字とす
あり早竟と月と云ふ字と陰と見まの二案
世に見はる漢家よりあつて文の家の名月
ありけり月と云ふとす

△ 秋よりや朔は汝世星とす

はらへぬの思ふ程の事
妹控の事とす神われ

爰より小倉句服中をてきふの表合せられ
朝日の服一のそとて月をむつてく来とい
て四重をいじに指あふはらとて一句を表し
まて月と二重をいさふあひぬゑに姨捨の
名をつりて月の仲とあくるやちんや芳郎
と花といひ文科と月といふも又近う月花
あふといふもいふてお句と回毎とふ所
きり山田の形容と称をいんやまふといふ
といふ芳郎といひ文科といひて月花と理を
論ふとれとおふせうつとてねとに作者

の眼力と云ふやちん月とあふといふ

おふといふといふ 月花

△ おふといふといふ 月花

おふといふといふ 月花

おふといふといふ 月花

け接おを越め之国より後川の二表を制し

おとせはやうおたふといふけきるなぬのふる表

ありあふれいけ表といふけきるなぬのふる表

ある月をおふく月花あるよたふといふけきる

佛あふといふけ表といふ花をちて月と花とい

い論なり或は祝言會といひ或は哀傷席に
り時をおひむねふ近の翁句あれは名残のを
とし宗近よりむすやまれの翁句もはね
あつても花をあふらふかれ或は一所の老人
や或は親族の功者よりむす一はらと一處の
始終と潤ふるをむすうると今此能席より
翁句をす下此場をおわしてふくこと我
事をもく人も座をまはらうと果たる翁句
もむすむねむす一はらの能席よりむす
論より及ぶことふ一はれも保すの能席より

い執事より一はらのむす一はらと名残の翁句は執事
とち一はらのむす一はらと執事よりむす一はらの略
一はらのむす一はらの祝言哀傷の翁句は
祝言哀傷の名残のむす一はらと新用のむす
あれは翁句は翁句の服よりむす一はらの翁
ととあふ一はらの或は貴賓高客を新
時よりむす一はらの能席より翁句をむす此は
て名残のむす一はらのむす一はらの翁句は一はらの
そはあれは一はらの翁句の所よりあふことあ
ふこと合ふ翁句とあり一はらの翁句は一はらの

齊句
亡

△

それいふ時此評論はけず句と評し又誤あり

帝曰王伯也
然其所以
當乎此服之
所

尊くたてやうとて各所のむすんで

よのほねの敵もあつてはれと尋ねて家評

△



計二連と五用と中用也前之張陣二百韻

古来竹のありしむいありて竹の巨細の差なりある
はるゝ我家のむねとき人偏の能備くを何
れとてふことを用ひ頼りて拍子にかけたる家
一ちて用ありといふ處へ後とけりて後集
に書かれたる中此曲節よりて名残の花といひ
これいふことよりて竹の附合とありてありぬ
ぬと因りてされぬ竹の二ちといふ用ありといふ
これいふ事なりとて千変ありて竹とてを深く
事し今一所のそとを居てといふ事な
もてこれ用ありてある事ありてありてあり

○ 當年より物名に事

古来より竹に此屏風といひ牡丹の宮に花といふ
とてあるやありて當年より用されとてあるの當年
にあることとありて當年より用されといふ相の同なり
と論より難く用て當年より用されといふ當年
ある一當年とてある此をいふありて

附句

竹の玉に當年をとりて

△ 附句

折かりて梅の花のひき信

竹の當年をとりての句やられけりて當年を

ハ仙人其まゝとけりけり曉の露とくらぬる
あれはまゝ客とるまの各同しとてなり指合を
くらねとてお句と括弧の指合ありてまゝ客
と當まゝ用かゝるぬる白露の二字とあり
つ後の括弧とまゝ客の附合やれるとあり
ゝとありける句作のまゝなりとてけり
て千句一万章とまゝとあるなり

秋凡そきりやあまゝとての色

△ 簾とすけりなり月夜

鳴るふ響も鈴も ね虫も

けね虫のちとれ和漢と奇絶の句にせけるいせ
て韻字もなり何とてそと錯綜顛倒の
とて論とれちとのふありやとぬいむと
あれいけ句とよのきねと作る時ね虫や響も
鈴も鳴るふとてふとれと各句と疑のやり
ありてちとのふ合のやりと遠まゝとてあり
ね虫もとてふとれと各語とものなりとありて用
ありとてなり顛倒のたとひける句作の用
と作るもせたりけりけりとのふとて香稻
啄餘鶯粒碧梧棲老几枝とる杜少陵

る各句せり此顛倒の用とする者稲粒といひ
碧梧枝といふ粒と枝といふをいひて用ふ多と
りて顛倒の比とありゆきよく錯綜顛倒
とあれと可なり事及とありてみるせとるを
杜律の諸おし錯綜顛倒の比といひて
の細言え及さるるを覚半句に按さるるに
い懸轉の比といひてさるるや事と鈴し中
結語と此一字をあらうとて代はははの七月
とるる一多とさむ文代も句格もあらう
とこのいふはてと句にも字に用せ用あれ
新奇

さうわうさうさうは格の用といふといひて
さうと句作の可し用あらうにさるるといふ物
あらうといふ句作のさるるといふとさる
下

○ 五字と語此事

むいふと五字と語の格と和漢と詩とを
あれと所合とけ格と用あらうに
さうとさうとさうの格とさうとさう
○ 五字と語此事
さうの格とさうの格とさうとさうと

そとちの所の所合よりそ武隆と名をいふ句を
はくし時の口誦は附とよ句のいふとて其れ
おとすあしるよりかくらとて附とて
けられおのけと起してそあてとてそ
い起はれとてあてられけり所をいふそ
の所とふれとて今や附と格例とある
そそ子れ又といふとてよは附の注用いふ
の所とあるそそや何やとて何やとて
そ部とてそそとていふは附の例ある
今世新制とていふとてあやとて加えそ

ある人の所合より

△ 何れとて何れとていふとて附と
名をいふとて附の所合より

け附合と名残の曲ありとて名をいふとて
詞のよ句と對して実をいふとて附の所
いはとてあてられけりとていふとて
といふとていふとて附の所合より
能附の所よりいふとてあてられけり
△ 何れとて何れとていふとて附と
何れとていふとて附の所合より

一、此の如く、
 二、此の如く、
 三、此の如く、
 四、此の如く、
 五、此の如く、
 六、此の如く、
 七、此の如く、
 八、此の如く、
 九、此の如く、
 十、此の如く、

一、此の如く、
 二、此の如く、
 三、此の如く、
 四、此の如く、
 五、此の如く、
 六、此の如く、
 七、此の如く、
 八、此の如く、
 九、此の如く、
 十、此の如く、

きくあつてはねい本綿のさひとあつて一とさ
と無さる人へ感さる人へはつた

○附合と七名八辨此事

中世より和歌や十辨より連歌や十辨より
附合とさふくあれと世に艶詞と世とい
ふと事誰と事とある故に連能の事
のさなより一歩千里せきといふありて名に
用ひ異ありとある一と世といふ我々の能
と七名あり附合と八辨ありと名用をさふ

十六條ありと十と事方世で名とを才と有心附
とつてと次と金銀といふと次と通句といふ
白草とことけいこととて事方の名とつて
ありと和歌と十辨とあるありと或は起性
とつて向附とつて拍子と金銀と金銀の標
とつてさふと名とあれとありと金銀と十論
とありと変化とつて金と一とあると金銀
と對附とよあるとあれとさふと曲節の事
とつてと式の名とつてとさふと一と終に
此ありとつて名残の事と曲節と

△ 商ひは功者ゝ家をおとす

親の位牌も寺代表^{ヲモ}見世

されは古来の對附とふら老本のみは極と
し市子に接の禮と附くを寺對といひ意
對といひ後にも聯句の例あれ今子親と
子代對と所の商ひの表^{ヲモ}店も寺代に禮の面^{ヲモ}側
と對して全くあるはさういふ詞は對とい
あらうことを例のするといふもこれより練の
まじ事といひからの害ありしとこそ曲節に
秘授とらるる世より古来の對附と今子新

製の對附と似る似ねたのまされとおさる
し附方の八旗とて人をおる世も後を
衣食令福のふとてけてはさるる有心の
附方とてさるるも場所をあらは東洛山あり
家内と家外のふといとてけておる今子親
の附方とてさるる一町分とて晦朝を夜よりおる
晴の所法といひ町部とてまゐる秋より
節供正月の行事といふ二旗とて多用して
或は有心の附合もあるて或は寺親の附合
もあるとてさるるに町部の二旗とて世より附

凡俗もてなほそむの挨拶も他流と事詠の儀
あれ二座一奥に附合もある一々相とて月
を念ふより凡雨を暖と云ふ一ては曉の響き
詞とておゆくと道向の用とある一親相
とて句とて此妻よりて月とてむとて世
の哀れを悔て親とて草のむすも猫の時
も霞くひ茶とのむ二便のおきゆと親
とてあそ親をたにされとも親おの句と一座
と顛むら附方あれいもむら同きも耳は
くちと一とてふきと一むら二ある一これと

虚実の咄也面れとも親おし似あつて或は源氏
狭衣より或は軍書物語のききとていふ
ね言とていふ代ありとゆとていふも書
れ面れとていふもいふとていふある一これ
も人の名とて一て一削の二句とていふも
おるより附方とておれくの面れとてあ
同きも耳はいふねとていふはねとて
て百とてあるとある一これとて
和歌の外はやまれ八所の真かとも
下附方あれとあると八所の塩梅とて

ひこまゝ目とぬきまゝに返さるにや。ふん
ほいゝる世心所着此故ふれい人教ふるよ
一丁例の式よりさかへきまゝに

障子とこれのタビちくはく

△ 智願とこれと老の目と接い

けり二座の雲と雲よりあつゝあつゝと
活とくそとタビのうらひより障子に木竹の
れとえゆと所と打撃の座とてこれい
智願と我の作とやいむとこれといけり
こちよりまをせり人の立眠くおるるを

智願の目とぬきまゝに返さるにや。ふん
起性の事とていふに目とぬきまゝに
智願とこれと老の目と接い
の目ぬきまゝに返さるにや。ふん
きん平竟と世心所着より一丁障子と
離附の二変より空接のけりいけり
おれ我家の今式と事方と附方と差ふと
一丁の附合より一時と才と打越より二丁の
まといと合せ次より折の変とあり次と我
る此より附合より一丁の配とありと一かく

そと例のふ俗習あり。往々祝言のひきまゝ
いふに、年辰を名目の風流あり。あるは十八番の
歌合よりそを讀み人と年辰とをうたふまゝに下
の句とあをて、二十二年の名とあたりたり
月花も二折の式あれとある十二句とせうにれ
今式より二花二月の法あり。廿式の遺訓は
る俗より一、二月と二花の時宜あり。或は納
の法を祝し、或は歳暮歳旦の賀より如致と
そあつるをせざるをうとせしむるを素と素は
そ尾と合より、月花の二花をあらはし、
あるは

あるは、あるは格より一、或は二折よりあるは時
あれとあるは公式の論よりあるは、あるは、あるは
とあれとせしむる長短の二行をあるは、あるは、
の新製より一、才丁を求韻の用あり、短音より
一時旦の常用あり、求韻の下にあり

○求韻の能讀より向む此事

あるは能讀の求韻よりあるは、あるは、あるは、
あり、和音、此韻は、あるは、あるは、あるは、
あるは、あるは、あるは、あるは、あるは、あるは、

あしき心遣は集の念とせねて連社の心
を催されし瓦葺き力あるよりたの事
まうてやこわきをそれよりよに求初め
へ俳諧の世にふく用あつても論より好事の所は
しめられし和音連歌のよりしは漢和とい
求初めといふよりあるを餘力ふれし減ぬの
し生をとけしあかき求初めのふとく
し詩を絶句より律詩より假名の二韻を用中
へこれし歌行類とせし篇よりききし換韻の格
あねし初め字より自由あつてけねし今式

へ長歌行といひ短歌行といふ二つの名目と新制
源氏行といひ仙行といふより古式の名目より行
のてきと添ふる韻と行やるといふより歌行類
といふるも但し長歌短歌といふは仙の風流
に名とあつて古例よりなりといふもあつるに
求初めの俳諧といふよりあつるを換韻の用
てふくの時に初めよりハくの時に初めより
同初めといふ初めとて同初めといふは俳諧の
差ふよりこれより和漢の旧例より初め
求初めの序説にあり和漢文操より悉くを

あれは式目へまゐるに及ぶ程のことと申す

七

の代をばよりて式よりて連年の控をつはよす
あともゆて季の季はみまあるも百初を
りておねの害あらん今より季他と短季とを
月花の所はちつてもより月秋の節やふ
それと季他と今に二む二月もあらんと宗祇の記
此勅免と古例とひきててねるを例のり今
ゆつりよとれまゝ況や今の短季の二花二月
へ論は及ぶとあらうと季秋の季とててて或る
よりるよとあらうと冬の季もよりるよと
あらうて四季をとりれもよりるよと定てま

能讀古とお

跋

渡部

いふ一（孔子の家語）子夏向孔子曰、顔回
之及人、奚若、子曰、回之信、見於丘、乃至
子路之及人、奚若、子曰、由之勇、見於丘、
子夏敬、進而問曰、然則四子何為事先生、
子曰、回能信而不能及、乃至由能勇而不能
怯、子夏敬、四子者、之有以易吾弗與也、此其所
以事吾也、云々、これより子路も顔回も孔子に及ぶ

不と、其まゝと云ふは、迂詐をばさる勇あること、
懐病ありて終に孔子と云ふるありあてなきを、
と瞻前忽後と讃いて顔回ひとりよく
知れども惜哉、不幸短命ありて孔子のるる
侍りしものと云ふ、あはれしく、今此能讀と云ふ
亦曰、楚秦漢のむらより二千余歳の事、其
を擧ぐるも、よく、断むと云ふ所
断すも、さうと人間の常情の虚しく、いふ實と
とあり、虚実のちやうと、迷ふ所あり、
武陵の芭蕉、舟を投じ、一碗の茶と云ふ、

更入百世此的盤文待与ふれ今一

享保庚戌二月日

五十六
安永十
辰二
二十七年

書目林

京寺町二條

野田治兵衛

俳諧書目籍同録

獅子庵遺稿

本朝文鑑

假名文集
全十卷

和漢文操

新古今評論
全七卷

俳諧十論

全十卷
秘説

十論及輯抄

全日本助語辨
二卷

新撰大和詞

全大和真名文
一卷

和漢百花賦

全再撰自享式
五卷

俳諧古今抄

全大和真名註
四卷

論語先後抄



